

鯉には胃がないから、冬眠明けの餌付けは要注意

鯉は水温の変化に合わせて、自らの体温を適切に調整する「変温動物」です。実際、鯉が生活する池の水温は、春夏秋冬を通して絶えず上昇・下降を繰り返しています。環境に適応できる鯉は、水温が零度近くになっても死にはしませんが、冬眠状態に入って、生理機能をほとんど停止させて、水底に沈んで、じっとしたまま微動だにしなくなります。

生理活動を中断した鯉は、餌を食べなくて、そのため消化液が出なくなります。したがって、鯉が冬眠に入る以前に餌を止めなければなりません。餌止めの時期の水温は 10℃前後が目安とされています。

また、冬眠明けの春先に餌を与えても、消化のための生理機能はただちに開始できず、それゆえ消化液は分泌できません。たとえ食べたとしても、消化されない状態の糞が排便されます。そのとき、消化器官を無理に働かせるため、やがて体調を壊して、悪くすれば梅雨を挟んで死に至ります。

なお、鯉には人の胃に相当する器官がなく、腸だけで消化するため、食べた物の消化作用において、人間よりずっと大きな負担が掛かります。人の胃は食道から運び込まれた食物を一時的にとどめおいて、自らが分泌する胃液と混ぜ合わせるミキサーの役目もしています。また、胃の中で分泌される胃液に含まれる塩酸が強い酸性を発揮して、腐敗防止に役立っています。それゆえ、人は少々固いものを食べても、胃が食べ物をどろどろに溶かしてくれて、腸が運んで体外に押し出してくれる働きをしています。

一方、鯉には胃がありません。腸は折りたたむようにして、腹部に収まっています。胃による消化の前段階がないので、腸だけの消化力は弱いものになりますが、腸の始まりの部分で胃液に相当する消化液をわずかに分泌しています。鯉の飼育において、春先の餌付けに用心が必要なおことをおわかりいただけたでしょうか？

春の餌付けは、消化しやすい餌から始めるのが基本です。たとえば、煮た麦などから与え始めて、徐々にふつうの餌に切り換えていくのが常道です。餌付けの時期は、桜の花が散るころが適切とされます。どんな植物も気象に敏感ですが、桜もまた気温に合わせて花を咲かせ、そして散っていきます。桜の散る時期が全国一定でないために、その時点が鯉の餌付けを開始する全国共通のガイドになっています。



人間と鯉の消化のしくみはこんなに違う